



日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター

No.19 2020年4月30日発行

■ 理事長挨拶

宮崎大学整形外科 帖佐 悦男

会員の皆様におかれましては、日頃の業務に加え COVID-19 感染対策で大変な日々をお過ごしのことと存じます。新型コロナウイルス感染により 2020 年 4 月には、世界の感染者数が 200 万人、死者数が 15 万人を超え依然として猛威を振るっています。被害に遭われました方々に、お見舞い申し上げます。この影響を受け 2020 年 6 月 18 日から 20 日に予定されていた第 46 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（JOSKAS との合同学術集会）が延期されました。学会延期は日本整形外科スポーツ医学会としても初めてのことであり、数年前から準備をしてこられた先生方におかれましては、今回苦渋の決断をなされご心労のことと拝察いたします。7 月末に開催予定でした東京オリンピック・パラリンピックをはじめほとんどの学会が延期・中止になりましたので、致し方ないことと思います。本会は、本年 12 月 17 日から 19 日に JOSKAS との合同開催を神戸国際会議場ですることになりました。是非、会員の皆様で石橋恭之会長を応援し協力することで、学会を大成功に導きましょう。

さて、理事長としての所信表明は、同ニュースレターやホームページにも述べさせていただきましたが、大切な点をあらためまして述べさせていただきます。

日本整形外科スポーツ医学会ならびにスポーツ医学の発展に貢献することを通じて、財政の健全化を図りながらスポーツ医学に関わる事業の推進とスポーツ専門の医学会としての役割を果たし、学会の活性化やスポーツドクターを含めた subspeciality への対応が本学会が担う重要な役割であり課題でもあると考えています。そのためにも、AOSSM、KOSSM、GOTS を含めたスポーツ医学会や医師以外のメディカルスタッフとの連携の推進が必要不可欠です。スポーツ医学の発展に整形外科医やその代表的学会であります本学会が果たす役割は重要であり、メディカルスタッフ、多職種、指導者などと、

より一層連携することがスポーツ医学の発展につながると考えております。また、トップアスリートだけではなくスポーツ愛好家や市民、障がい者スポーツに関わる方に対し運動器を中心に関与し、トータルに評価・指導できるスポーツ医の育成にも学会全体で取り組み、スポーツドクターのみならずメディカルスタッフの育成や市民への啓発活動を行っていききたいと思います。

スポーツ医学に関し外傷・障害が発生した場合、早期診断・早期治療が重要なことは至極当然ですが、予防医学により一層重点をおく時期がきていると思います。学童期からの運動・スポーツや学校運動器検診を通して、日本整形外科学会の進めるロコモティブシンドロームの啓発や予防に貢献し、また、障害予防を進めることで、外傷や障害のために運動やスポーツ活動を断念せざるをえなくなる選手やスポーツ愛好家を減らせればとも思っております。

上述しましたことを実現するためにも、教育・研究・臨床を通して運動器の観点から多面的にスポーツ医学について発表および議論する場としての本学会は大変重要と考えており、その使命もあります。また、会員相互の親睦のためにも本学会は必要不可欠と考え、今後 JOSKAS と合同の学会開催など様々な課題については、会員の皆様と相談しながら解決していく所存です。その受け皿として将来構想委員会を復活させ、本委員会ならびに JOSKAS の委員会とさまざまな課題を討議し皆様に再考を願いますので、どうぞよろしくお願い致します。

最後になりましたが、一刻も早く新型コロナウイルス感染症が収束に向かいますことを切に願っております。

浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承し、ますます発展できますよう誠心誠意努力する所存です。どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

■ 第 45 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を終えて

第 45 回会長 中村 博亮

大阪市立大学整形外科

この度、第 45 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を令和元年 8 月 30、31 日の 2 日間にわたって大阪駅前のナレッジキャピタル コングレコンベンションセンターにおいて開催させて頂きました。2 日間の開催を通して医師、メディカルスタッフ、学生の方々含め計 1734 名の参加を頂くことができました。過去最高の参加者になりましたこと、この紙面をお借りして皆様方に深謝申し上げます。大阪市立大学整形外科学教室が本学会を主催させて頂くのは、1975 年に第 1 回、1977 年に第 3 回を主催させて頂いた以来、実に 42 年ぶりとなりました（写真 1）。スポーツ医学は整形外科の大きな専門分野であり、当教室では故市川宣恭先生をはじめ、廣橋賢次先生や大久保衛先生らによって、数々の業績が蓄積されてきました。ノーベル賞受賞者である山中伸弥先生も、スポーツ医学の道を目指して、我々整

形外科学教室に 2 年間という短い時間ではありますが、在籍しておられたことは周知の事実です（写真 2）。今回はテーマを【原点からの飛躍と多様性への対応】とさせて頂きました（写真 3）。我々の教室が本学会第 1 回を開催させて頂いた原点に立ち戻るといふことと、そこからの飛躍という意味を込めていただきました。さらにスポーツ整形外科学の難しさはその多様性にあり、それに対応することが、予防や治療を成功に導くためのキーポイントになることを考え、多様性への対応をテーマに加えしました。

今回の公募演題数は 415 演題という多くの演題応募を頂きました。本学術集会の直後には 2019 年ラグビーワールドカップが、また翌 2020 年には東京オリンピック・パラリンピックが開催予定であります。これらの背景をふまえ文化講演には橋本聖子参



写真 1：第 45 回日本整形外科スポーツ医学会 中村博亮会長



写真 2：京都 iPS 研究所 所長 山中伸弥教授



写真 3：2019 JOSSM ポスター

議院議員に「2020年オリンピック・パラリンピックがもたらすもの—スポーツを通じた人材育成と街づくり—」をご講演頂きました(写真4)。学会終了直後にはオリンピック担当大臣になられました。素晴らしい内容で大変好評でした。特別セッション1ではオリンピック・パラリンピック組織委員会理事の室伏広治様に「スポーツが健康維持に寄与するための条件」をご講演いただき(写真5)、特別企画では「国際総合スポーツ大会におけるメディカル対策～東京オリンピック・パラリンピックに向けて～」を企画しました。

2019年ラグビーワールドカップに関しては、特

別企画「ラグビーワールドカップ2019 勝利の方程式～選手、トレーナー、ドクターの立場から～」として「ラグビーワールドカップ」を選手とメディカルスタッフがどのように一体となって「勝利」していくかを議論していただきました(写真6)。実際の大会においてもご存知の通り日本代表は予選リーグを突破しましたが、選手だけでなくサポートされる方々も「One Team」となって、今大会に取り組んでおられたことがよく理解できました。またシンポジウムでは、「コリジョンスポーツに特有な外傷」を取り上げました。特別講演としまして、本学会に長年貢献してこられました武藤芳照先生に「超高齢



写真4：文化講演 オリンピック担当大臣 橋本聖子
参議院議員



写真5：特別セッション1 室伏広治先生



写真6：特別企画「ラグビーワールドカップ2019 勝利の方程式～選手、トレーナー、ドクターの立場から～」



写真 7：特別講演 武藤芳照先生、吉矢晋一先生



写真 8：KOSSM 学会長の Prof. Yoon Je Cho 先生
(左から 2 番目) と Prof Dan Guttman 先生
(下段)



写真 9：学会長とラグビー元日本代表の大野選手
(右)、箕内選手 (左)



写真 10：全体懇親会でのバブリーダンス

社会におけるスポーツ医学の役割」、吉矢晋一先生に「スポーツ医学の現場で」と題してご講演をお願いし、大変興味深いご講演をいただきました(写真7)。その他スポーツ整形外科として欠かせないテーマとして「スポーツとこころの関係 ～疾病から治療まで～」 「コアトレーニングの神髄」 「スポーツ現場対応における諸問題」について議論していただきましたが、いずれのセッションにおいても活発な討論がなされました。海外からの招待講演は KOSSM (韓国整形外科スポーツ医学会) 学会長の Prof. Yoon Je Cho 先生 (Kyung Hee University Medical Center) を、アメリカから肩関節鏡手術のスペシャリストである Prof Dan Guttmann 先生 (Taos Orthopaedic Institute) をお招きしご講演頂きました(写真8)。

また、前日ユニバーサル・スタジオ・ジャパンで行った会長晩さん会には、家族連れで沢山の会員の方にご参加いただいたとともに、ラグビーの大野選手や箕内選手も参加してくれ(写真9)、いつもとは違った雰囲気で大いに盛り上がりました。全体懇親会ではバブリーダンスを登美丘高校 OB の方々に披露していただき、大いなる盛り上がりを見せました(写真10)。また学会でのスポーツアクティビティとしてラグビー大会とテニス大会を開催させて

いただきました(写真11)。われわれ教室のルーツともいえる本学会を主催できたことは大変光栄なことであり、理事、代議員、会員の先生方やご支援、ご助力を賜りました先生方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます、ご報告とさせていただきます(写真12)。



写真 11：親善ラグビー大会



写真 12：大阪市立大学整形外科教室一同

■ 第46回日本整形外科スポーツ医学会学術集会を開催するにあたって

第46回会長 石橋 恭之

弘前大学整形外科



この度、2020年6月18～20日、札幌コンベンションセンターにおいて第46回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（JOSSM）を開催させていただきます。本学会を弘前大学整形外科学教室が主催させていただきますのは、1994年に原田征行が主催して以来2回目で、26年ぶりになります。伝統のある本学会を、オリンピックが日本で開催される記念すべき年に主催させていただきますことを、非常に光栄に感じるとともに、同門会一同感謝しております。

すでにお知らせしているとおり、本学術集会は第12回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（JOSKAS）との合同学会となります。さらに第18回JOSSM-KOSSM（韓国整形外科スポーツ医学会）combined meeting、第19回日仏整形外科学会（会長 星忠行先生）、第22回日独整形災害外科学会（会長 根尾昌志先生）も同時併催されます。今回のJOSKAS・JOSSM combined meetingのテーマを、『2020 その先へ—調和と発展—（Beyond 2020 — Harmony and Progress —）』とさせていただきます。“2020 その先へ”は、もちろん東京オリンピックを意識しておりますが、その先を見据えてスポーツ医学を議論していこうという意味を込めています。“調和と発展”は、両学会が共に歩み寄り発展的な変化を遂げていこうという決意を表しています。JOSSMもJOSKASも、今や、医師・理学療法士・トレーナーなどからなる大きな学術団体となりました。この両学会の学会員が一堂に会し、同じ土俵で運動器の治療や予防をディスカッションできる機会はそう多くはありません。次世代を担う若い人達のためにも、今後の学会のあり方も考える良い機会になると思います。

今回はcombined meetingということで、JOSSM理事長の帖佐悦男先生とJOSKAS理事長の安達伸生先生に理事長講演をお願いしております。また特別講演・基調講演として、元プロ野球選手の桑田真澄様、大相撲の貴乃花光司様（元貴乃花関）を予定しております。8つのシンポジウムを予定しておりますが、パラリンピックも意識して、これまで本学会では取り上げられてこなかった“がんサバイバーのスポーツ”などもディスカッションしたいと思います。また、14つの国際シンポジウムでは、日本

を代表するトップリーダーと海外からのゲストスピーカーとのホットなディスカッションをお楽しみいただければと思います。これらに加え、5つのパネルディスカッションと3つの国際パネルディスカッションも予定しております。1月末には一般演題の応募を締め切らせていただきましたが、約1400もの演題をいただきました。会場の都合上、e-ポスターやポスターセッションが多くなるかも知れませんが、充実したdiscussionができるように準備していききたいと思います。

土曜日の午後から、関節鏡の技術指導を中心とした恒例のJOSKASセミナーがあります。今回はcombined meetingということで、アスリートを指導するPTや医師を対象としてJOSSMセミナーも開催します。ここでは「ACL損傷・再損傷予防のためのトレーニング」、「傷害予防とパフォーマンスアップのための投球フォーム指導」、また「グロインペインの予防とアスレチックリハビリテーション」を講義と実技を交えて行いたいと思います。直接実技指導を行う都合上、人数に限りがありますのでお早めにご登録頂ければと思います。

学会参加人数の関係もあり、地元青森での開催は叶いませんが、多少、青森色を出した楽しい学会にしたいと考えております。6月の札幌は季候も良く、訪れるにはもっとも良い季節です。現在、新型コロナウイルスの影響で本学会の開催も予断を許さない状況ではありますが、是非、多くの皆様方にご参加いただき、活発なご討論を心よりお願い申し上げます。

※本会長挨拶は2月に執筆されたものです。JOSKAS・JOSSM combined meetingは、新型コロナウイルス拡大のため、3月23日に延期が決定されました。新しい会期は2020年12月17～19日、神戸国際会議場です。今後プログラム等に変更が生じる予定ですので、最新の情報は学会HPをご覧ください。



■ 副理事長挨拶

此度伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の副理事長（財務担当）の2期目を拝命いたしました。多くの先生方のご尽力で会員数が徐々に増加しており、学会も盛り上がりを見せております。さらに財政的基盤を安定させ、JOSSMの様々な活動をより充実できますよう、努力して参る所存でございます。

前回の任期中に本会が法人化され、学術集会の会計を学会本体で管理することになり、その対応に務めてまいりました。さらに本年度から向こう3年間、JOSSMとJOSKASの学術集会を同時期に開催することが決まっております。整形外科におけるスポーツ医学関連の学会を同時期に行うことは、会員にとりまして学術的な事項はもとより、経済的にも時間的にも大変意義があると思っております。これに伴い財務的には若干の修正すべき時期的な問題がございます。それは現在の定款では年度の会計を6月末までに確定する必要があるということでもあります。これまで本会は毎年9月頃に開催されてきましたが、今年は前倒しされ6月となり、時間的に学術集会会計の集計を終わらせることが難しい状況にあります。

奈良県立医科大学整形外科 田中 康仁 (財務委員会 担当)

そのため定款等を変更する必要がありますが生じておりますので、皆様にはご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昨年のラグビーワールドカップではさまざまなルーツを持った選手がONE TEAM（ワンチーム）としてまとまり、日本チームが史上初めてベスト8に勝ち上がり、日本中が大変な盛り上がりを見せ、スポーツの力を実感することができました。そして2020東京オリンピックを迎え、スポーツに尚一層注目が集まる本年に、整形外科としてスポーツを論じる学会が一つにまとまり大きな発展を目指すことができれば、会員にとって恩恵は大きく、また海外に情報を発信していく上でも大きな力を得ることができると考えます。会員ファーストの考えのもと、皆様方と力を合わせて残り2年間の任期を精一杯務めますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



徳島大学整形外科 西良 浩一 (総務委員会 担当)

2019年より副理事長を拝命しました。2015-2017年に続き、二度目の副理事長となります。前回は、松本秀男理事長の元で筒井廣明先生とともに副理事長を務めさせていただきました。その時は、初めての経験がたくさんあり、無我夢中で、皆様方に大変なご迷惑をおかけしたように思います。この度は、二度目ということで、前回の経験を生かしてさらに学会の発展および学会員の皆様の為に全力を注ぐ所存です。

現在のJOSSMにおける重要な案件はJOSKASとの合併問題です。昨年のアンケート調査では、両学会とも70-80%が合併に賛成するという結果でした。それを受け、現在JOSSMがさらに発展すべく

意義のある合併に向け全力で動いております。JOSSMは日本で唯一、整形外科医が中心となりアスリートのスポーツ障害および外傷を討論する学会です。全ての会場で主役はアスリートです。今回のJOSKASとの合併後もこのスタンスを変えず、整形外科医師主導アスリートファーストの学会に、さらに進化するよう粉骨砕身尽力いたします。

みなさま、よろしくお願い申し上げます。



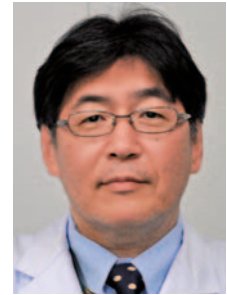
■ 理事挨拶

このたびは佐々 悦男理事長新体制のもと、引き続き編集委員会担当理事を務めさせていただきます。2期目ではありますが、改めてその重責を痛感しております。今後も微力ではありますが、本学会の発展に尽力する所存であります。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、スポーツ医学は社会的にもさらに注目を集めていくことは間違いありません。それと同時に、本学会が果たす役割はさらに重要になります。そのためにも、本学会の若い世代の会員数を増やし、学術的プレゼンスを向上させていく必要があります。そのプレゼンス向上の中核を担うのが、日本整形外科学会スポーツ医学会誌の充実であることは間違

北海道大学整形外科 岩崎 倫政 (編集委員会 担当)

いありません。これまでの担当理事ならびに編集委員会の先生方の多大なご尽力により、本学会誌は非常に質の高いものになっております。今後はオンライン化による、論文投稿ならびに査読システムの簡便化を推進していきたい



と思います。これにより会員の先生方からの投稿を促し、さらに充実した学会誌を発刊していきたいと考えています。学会員の皆様には、ご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

東京慈恵会医科大学スポーツ・ウェルネスクリニック 舟崎 裕記 (学術検討委員会 担当)

この度、日本整形外科学会スポーツ医学会の理事を拝命し、身に余る光栄とともにその重責を痛感しております。今回は、学術検討委員会を担当させていただくことになりました。本委員会では引き続き、研究助成の審査、優秀論文の選考、日本整形外科学会学術総会のシンポジウム提案などを中心に業務を行ってまいります。昨年はラグビーワールドカップ、そして本年は東京オリンピック、パラリンピックが開催される年でもあり、日本におけるさまざまなカテゴリー、年代に浸透しているスポーツへの関心は益々高まってきています。同時に、多岐にわたるスポーツ関連傷害に対して、それぞれの要求に応じた治療、予防を行ううえで、スポーツ整形外科医を中心とする本学会の果たすべき役割は多大であると考えます。スポーツ傷害を扱う上で重要なこと

は、静的アライメントのみならず動的要素を考慮することは言うまでもありません。そのためにはスポーツ現場へ向かい、リハビリでは選手の動きを観察することも重要であります。忙しい整形外科医にとってその両立は決して容



易なものではありません。今後、学術、研究活動を通じてその成果を世界に発信し、本学会がスポーツ関連傷害に対してイニシアチブをとって現場との連携を含めた系統的な治療体系を構築していくことが重要と考えております。甚だ微力ではございますが、本学会の発展のため鋭意努力する所存です。何卒よろしくようお願い申し上げます。

国立病院機構京都医療センター整形外科 中川 泰彰
(広報委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただきました国立病院機構京都医療センター整形外科の中川泰彰です。広報委員会を担当させていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

私は京都大学医学部の学生時代からスポーツ医学に興味を持ち、医師になった比較的早期に本学会に入会させていただきました。当時、京都大学整形外科では、まだスポーツ医学分野が確立しておらず、本学会に参加し、色々と沢山のことを学ばせていただきました。大変感謝している学会です。ところが、昨今本学会がJOSKASに吸収合併されそうな流れが起こり始めています。ここ数年社員総会を始め、色々な会議で問題提起させていただきましたが、この流れの理念がどこからも聞こえてこず、また、進行状況が密室で行われているように思われて仕方ありませんでした。スポーツ医学を大変愛する会員として、このまま黙って見過ごすことが罪悪であると思われ、この度本学会の理事に立候補させていただ

き、就任させていただいた次第です。当然、将来構想委員会の委員にも立候補させていただき、現在、帖佐理事長を含めたJOSSM側の委員5名とともに、JOSKAS側の委員と今後のことを交渉しているところです。さすがに、この



内容はまだ公表できない点はお許しいただきたいのですが、理事会や社員総会の議事録が公開されていないのは問題ととらえ、前回の理事会でこの2つの会議の議事録公開を提案し、決議いただきました。近いうちにこれらの議事録を本学会ホームページの会員専用ページに公開いたします。

本学会の将来のことを十分に考え、極力情報公開していくことを目指して、頑張っていく所存です。学会員の皆様方には、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

神戸大学整形外科 黒田 良祐
(国際委員会 担当)

2017年に理事に就任し、このたび2期目のご許可を頂き、務めさせていただくことになりました。JOSSMは非常に国際的な学会であり、海外の学会とのかかわりが強く、私は担当理事としてGOTS (German-Austrian-Swiss Society for Orthopaedic Traumatologic Sports Medicine) traveling fellowの受け入れやAOSSM (American Orthopaedic Society for Sports Medicine) へのtraveling fellow派遣選考、派遣先との交渉などを行ってまいりました。引き続き、理事としてAOSSM、GOTS、KOSSM (Korean Orthopaedic Society for Sports Medicine) との相互関係を更に強化し、これまで以上に密な交流を目指し、学会の国際化に貢献して参りたいと考えて

おります。私自身は臨床において膝関節損傷に対する治療を専門とし、基礎研究において膝関節バイオメカニクスや再生医療に関するバイオリサーチなどを行い、さらに関西に本拠地をおくプロや学生スポーツチームのチ



ームドクターを務め、地域のスポーツ振興に貢献しております。微力ながら本学会の発展に尽力致す所存でございます。学会員の皆様にはご指導ご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

船橋整形外科病院肩関節・肘関節センター 菅谷 啓之
(国際委員会委員長)

このたび日本整形外科学会スポーツ医学会の理事を再度拝命し、大変光栄に存じますとともに責任の重さを痛感致しております。本学会には1993年に入会して以来、スポーツ選手の肩関節・肘関節障害の治療を自分のライフワークと定め、学会発表や聴講を通じて深く本学会と関わらせて頂いてきました。一期目二期目の理事(2013年から2017年)では国際委員会担当理事として、別府諸兄アドバイザー、熊井司委員長に多大なるサポートを受けながら何とか4年間無事に勤めることができました。2017年に理事を退任してからは、黒田良介担当理事の元、国際委員長を2年間務めさせて頂きましたが、本年からも理事でありながら国際委員長を引き続いて務めさせて頂くことになりました。国際委員会の役割は、毎年の行事であるJOSSM USAトラベリングフェローの派遣とAOSSMとの関係強化、GOTSトラベリ

ングフェローの派遣および受け入れ、JOSSM/KOSSM 共催学会のサポートが3本柱となっております。本学会の歴史と伝統を踏まえて、globalな視野を持った若手学会員の育成に特に重点を置いて頑張っていく所存です。また、理事長副理事長を中心とする総務委員会のメンバーとしても活動させて頂いておりますが、これも学会の方向性を決める極めて重要な委員会でありませぬ。浅学非才の身ではございますが、本学会の伝統を継承しつつ益々発展できますよう誠心誠意努力する所存ですので、どうかご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



国立スポーツ科学センターメディカルセンター 奥脇 透
(教育研修委員会 担当)

このたび、本学会の理事を拝命し、また「教育研修委員会」を担当させて頂くことになりました。この紙面をお借りして、一言ご挨拶させていただきます。

現在、本学会が抱える問題は決して少なくありません。とくに「スポーツ整形外科医」の立ち位置については、自らも含めて再考する時期に来ていると思います。

思い起こせば、私が整形外科医(専門医)となったのは、30年前のことでした。その6年前、筑波大学整形外科に入局した際に、当時の教授(吉川靖三先生)から言われた言葉は、「まずは、整形外科として10年がんばってみなさい。そこからスポーツドクターを目指せばよい。」でした。振り返ってみると、まさにそこからの10年の研修で培った経験があったからこそ、現在の自分があると考えています。

その一方で、チームドクターとしての経験を通じ

て、日本スポーツ協会公認スポーツドクターにもなっています。まさにこちらは、競技団体に必要なチームドクターを認定する制度です。

そうすると、日本整形外科学会認定スポーツ医は、整形外科専門医の中から、社会に

貢献できるスポーツドクターを認定する制度ということになるでしょう。当然ながら、その対象はジュニアからシニアまで、さまざまなスポーツ外傷・障害を扱うことになります。その制度を充実させるべく、微力ながら貢献させて頂きたいと思いません。そのためには、本学会の先生方のご指導およびご支援が欠かせません。皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。



弘前大学リハビリテーション科 津田 英一
(教育研修委員会委員長)

この度、伝統ある日本整形外科学スポーツ医学会の理事に就任させて頂くことになりました。誠に身に余る光栄であり、その責務の重大さにあらためまして身の引き締まる思いです。

前任中は教育研修委員会委員長として、市民・学生へのスポーツ医学の紹介、研修医・若手医師に対するスポーツ医学教育のシステム作りなどの事業に携わって参りました。前者は毎年多くの参加者で盛会となり、後者はオンラインシステムが整備され本格運用が開始となりました。スポーツ障害・外傷診療の主役を担う整形外科医には、専門的な診断・治療とともに、予防やコンディショニングまで含めたスポーツ選手のトータルケア・マネジメントへの対応が求められています。「整形外科学及び運動器科学領域におけるスポーツ医学の進歩普及」を理念として掲げる本学会では、学術集会を通じたエビデンスの確立・医学情報の発信、国内・海外学会との相互交流、スポーツ医学教育の進展を今一層進めて

いく必要があります。本年の第46回学術集会は、石橋恭之会長(弘前大)のもと第12回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会(JOSKAS)と合同で開催されます。是非とも合同開催を成功させスポーツ医学の発展により一層寄与できるよう、担当理事として全力でサポートして参りたいと思います。



整形外科医を志望する医学生や研修医の中には、スポーツ医学へ興味を持つものが益々増えていると実感しています。彼らの期待に応えられるよう理事の職務に専心し、本学会の更なる発展に貢献できるよう努力して参ります。会員の皆様には引き続きご指導、ご鞭撻いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

岡山大学整形外科 尾崎 敏文
(社会保険委員会 担当)

このたび日本整形外科学スポーツ医学会の理事に再任させていただくことになりました。本学会会員の皆様はこの紙面をお借りしましてご挨拶を申し上げます。委員会では社会保険委員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。

東京オリンピック・パラリンピックの日本開催が約1年延期となりましたが、スポーツ活動は各年代にわたって盛んになっております。また、国をあげて選手の医科学的サポート体制を充実させる機運も高まっています。選手のスポーツ損傷を防ぐため、さらにトラブルが起きた場合には適切に治療を行いスポーツ活動に復帰させるために、また競技能力の向上など、スポーツ選手を支える医療従事者の役割が非常に大切です。現在、私は岡山県スポーツ協会の理事として仕事をいただいております。また、教室員もJリーグチームや実業団陸上部などのチーム

ドクターとして現場でスポーツ活動をサポートしています。また、国体選抜チームなどの帯同、一般市民、およびスポーツ指導者を対象とした講演活動などを行っています。このようなスポーツ活動の支援を続けながら、スポーツ損傷の予防と治療に関する研究を行い選手の競技能力向上に貢献するとともに学会の発展にも寄与したく存じます。



微力ではございますが、帖佐悦男理事長はじめ副理事長、理事の先生方のご指導を賜りながら、本学会の運営にかかわって参りたい所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本医科大学千葉北総病院整形外科 橋口 宏
(メンバーシップ委員会 担当)

2017年、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会理事の末席に加えて戴き、この度2期目を務めさせて頂くことになりました。今回の理事継続にあたりご支援を頂戴致しました先生方、理事会にてご指導を戴きました先生方の負託にお応えできますよう、可能な限り努力を傾注するよう心掛けて参りたいと存じます。

ご存知の通り、スポーツ選手に対するコンディショニング向上やメディカルチェック、障害・外傷に対する予防、診断、治療には医師のみならず、トレーナーや理学療法士などから構成されるチーム医療が非常に重要となります。治療に当たっているトレーナーや理学療法士の観点は、選手だけでなく、われわれ医師にとっても貴重なアドバイスになることがしばしばあります。また、現在は子供から高齢者まで積極的なスポーツ活動が推奨されています。

特に超高齢化社会を迎え、ロコモティブシンドロームやフレイル予防の観点からも運動の重要性が提言されています。高齢者スポーツや運動療法に関しても理学療法士の貢献度は非常に高くなっており、本学会発展のためにも、その存在は不可欠なものであり、多くの方が本学会に参加されることが望まれます。2期目も引き続きメンバーシップ委員会を担当させていただきます。厳格な資格審査を行いながらも、スポーツ医学を志し学ぶ意欲のある方々に入会して戴き、学会員増加のために尽力していく所存です。

今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



聖マリアンナ医科大学整形外科 仁木 久照
(ガイドライン策定委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科学会スポーツ医学会の理事に就任させていただき、またガイドライン策定委員会を担当することになりました。本学会の会員の皆様はこの場をお借りして感謝を申し上げますと共に、新任のご挨拶を申し上げたいと思います。

私がJOSSMとのかかわりで最も印象に残っているのは、第36回(2010年)学術集会の事務局長を務めたことです。最近では役員の方をはじめ歴代会長のご尽力により参加者数も多く学術集会は活況を呈していますが、当時は参加者数が年々減少していて、演題数・参加者数の増加が大きな課題でした。結果的に参加者数は盛り返し安堵した記憶がございます。10年後、今回は理事の一人としてかかわりを持たせていただくこと、大変光栄に存じます。

アキレス腱断裂診療ガイドラインは、初版は伊藤博元先生を委員長として2007年に、改訂第2版は現JOSSM理事長の帖佐悦夫先生を委員長として昨年出版されました。初版から改定第2版への主な変

更点はMindsのアウトカム評価を参考に検討されたこと、治療と合併症の章のclinical question (CQ)が増えたことです。いかに低侵襲で早期復帰させるか、合併症とその対策、など多方面で進歩し続けている分野と言えます。

次回の改訂に向け、準備してまいりたいと思いません。

2020年は東京オリパラの年です。「スポーツ医学の進歩普及に貢献する」という本学会の目的を遂行していく絶好の機会となります。大変微力ではございますが、帖佐理事長をお支えすべく与えられた職責を全うし、皆様とともに本学会の目標に向かって進んでまいりたい所存です。ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくようお願い申し上げます。



愛知医科大学整形外科 出家 正隆
(定款等検討委員会 担当)

この度、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会の理事という大任を拝命しその責任の重さを痛感するとともに、日本のスポーツ医学をリードする学会での要職を拝命し光栄に存じます。委員会では定款等検討委員会を担当しておりますのでよろしくお願い致します。東京オリンピック・パラリンピックにより、今まで以上にスポーツへの関心、スポーツ医学への関心が集まり、注目度も高まっています。スポーツに関する学会は、本会以外にありますが、スポーツ医学と整形外科の両者の要素を兼ね備えた本会は、その中心的な会であり、我々整形外科医は運動器治療においてスポーツ医学の中心的役割を担ってきました。本学会の役割は、整形外科医を中心としてスポーツ医学にかかわる会員が運動器スポーツ

医学に関する既存および新しい検査、診断、治療などを検討・討論する場を提供することであり、優れた研究成果を国内外へ向けて発信することだと思います。今後も本会が中心的役割を果たすためには、充実した学術集会の開催と本学会の継続的な発展が不可欠と考えます。その実行に、魅力にあふれかつ有益な情報を提供できる学会になるように、そして更なる発展に繋がるよう、微力ですが尽くしていく所存です。何卒、会員の皆様のご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



広島大学整形外科 安達 伸生
(倫理・利益相反委員会 担当)

このたび帖佐悦男理事長のもと、伝統ある日本整形外科スポーツ医学会（JOSSM）の理事を務めさせていただくことになりました。大変な名誉であるとともに、その責任の重さを痛感しております。大変若輩者ですが諸先生方のご指導を受けながら学会発展のため邁進いたしますので、どうか宜しく願います。

JOSSMはその名の通り、スポーツ医学と整形外科の両者の要素を兼ね備えた学会であり、スポーツ医学における整形外科医の役割とともにJOSSMの重要性は論を俟ちません。今後はJOSKAS、日本臨床スポーツ医学会など他のスポーツ関連学会との連携、協力体制が重要と考えます。関連学会とも連携をとりつつJOSSMの発展のため学会活動、委員

会活動を通じて努力する所存ですので、会員の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。理事としては引き続き「倫理・利益相反委員会」を担当させていただきます。

昨年はラグビーワールドカップで日本中が熱狂し、私もわかラグビーファンになりました。「ONE TEAM」のスローガンとともにチーム一丸となって戦う姿には、大変感動しました。JOSSMも学会全体として大きな目標に向かって進む一つのチームでありたいと思います。



■ 監事挨拶

令和元年度の役員改定に伴い監事を務めさせて頂く事になりました柴田と申します。私は1981年に大学を卒業し、これまで一貫して肩関節外科のスポーツ障害の治療・研究に携わって参りました。アマチュアからプロまで多くのアスリートの診療に携わりスポーツ復帰へのお手伝いをしてまいりました。保存療法が功を奏さない選手に対しては手術治療を検討せざるを得ないのですが、最も重要なのは故障をおこしにくいトレーニング理論の開発だと考えております。質の高い練習を続ける事が強い選手、高度のスキルを有する選手の育成に必要なのは論を待ちませんが、故障をおこせば試合はもとより練習の継続も不可能になります。本学会は医師、スポーツ科学者、トレーナーなどが一同に会してスポーツ医学を実践する場です。それぞれの分野の第一人者が知恵を出し合いスポーツ医学を発展させて

福岡大学筑紫病院 柴田 陽三

いる大変特色ある学会と言えます。特に今年は東京オリンピックの開催年にあたり、本学会の役割は大変重要で日本のスポーツ医学のあり方を世界に発信する場と言えます。



私は平成25年から29年まで本学会の理事を務めさせて頂き雑誌の編集委員会を担当させて頂きました。役員を2年間お休みさせて頂きましたが、この度、監事の大役を仰せつかり身の引き締まる思いです。これまで本学会を引っ張ってこられた諸先輩方の理念を継承しながら、伝統ある本学会の一層の発展のために尽力してまいりたいと存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

札幌医科大学整形外科 山下 敏彦

私はこれまで本学会の理事を務めてきましたが、令和2年度より監事を拝命しました。最近年齢のせい、いろいろな学会の監事を仰せつかることが多くなってきました。

「監事」と聞くと、「会計監査をする人」「年配あるいは引退間近な人が就く役職」といったイメージしか持っていませんでしたが、この際、監事の役割とは何かを調べてみました。まず、本学会の定款によると、「監事の職務及び権限」として、「監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する」、さらには「監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、本法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる」とされています。また、Wikipediaを見てみると、監事の職務として、「理事の業務執行の状況を監査すること」「財産の状況を監査するこ

と」そして「業務または財産に関し不正の行為または法令若しくは定款に違反する重大な事実があることを発見した場合にはこれを社員総会または所轄庁に報告すること」などとあります。



つまり監事には、会計監査の業務のほかに、学会における「お目付け役」「ご意見番」的な役割があるらしいです。私には、もとよりこのような重責を担う見識も人徳もございませんが、帖佐理事長をはじめとする理事会そして学会の運営・学術活動を陰ながらサポートさせていただき、本学会のさらなる発展に少しでもお役に立てるよう精進してまいる所存です。

2019 年度 JOSSM-USA Travelling Fellowship 報告

九州労災病院 整形外科・スポーツ整形外科 田代 泰隆

今回のトラベリングフェローでは、まず7/10～14に Boston で開催された AOSSM に参加させていただきました(図1)。私が主に参加した膝関節外科の領域では、早朝から前十字靭帯(ACL)の再再建術についての講義や少人数制での症例検討会が連日開催され、術前計画の立て方から骨孔拡大や不安定性への対処、骨移植を併用した二次的再再建術まで、米国での豊富な経験を有するエキスパート陣から学ばせていただきました。また、半月板損傷に対しては、Biologics の活用が注目されており、Platelet-Rich Plasma (PRP) や Fibrin Clot、骨髄液濃縮製剤(bone marrow aspirate concentrate ; BMAC) に関する最新のエビデンスが報告されていました。学会後にはフェローの先生方とシーフードを堪能したり、留学していた Pittsburgh 大学の同窓会に参加させていただき、旧交を温めることができました。

続いて、空路カリフォルニアの Sacramento へ移動し、7/15～17に UC Davis の Dr. Eric Giza と Dr. Christopher Kreulen を訪問しました(図2)。UC Davis のプログラムは非常に充実しており、屍体膝施設での足関節手術トレーニングや講義を受けた上で上述の2名の先生方の ATFL 再建やリスフラン靭帯修復、尖足に対するアキレス延長や後脛骨筋腱移行など、関節鏡からオープンの手術まで、豊富な手術症例を見学させていただきました。Giza 先生は AJSM を始め足関節手術分野の学術業績に優れている上、私達フェローにも大変友好的で、素晴らしい経験をさせていただきました。

その他、Pittsburgh 大学や Andrew's Clinic、HSS でも有意義な経験を積ませていただき、この



図1. ボストンでの AOSSM 学会場で菅谷先生(中央)、松本先生(中央右)と



図2. 屍体膝ワークショップの終了後、Dr. Giza (中央)、Dr. Kreulen (左)、臨床フェローの Dr. Fogleman (右端)と

ような貴重な機会を与えて下さった JOSSM の先生方や事務局の方々に心より感謝申し上げます。

2019 年度 JOSSM-USA Traveling Fellowship 報告

名古屋市立大学院医学研究科整形外科学講座 吉田 雅人

今回参加させて頂きました JOSSM-USA Traveling Fellowship に関して報告させて頂きます。AOSSM に参加後、4カ所の施設を訪問させて頂きましたが、3番目と4番目の訪問先である University of Pittsburgh (July 18-20) と American Sports Medicine Institute (ASMI) (July 21-24) について報告させて頂きます。

University of Pittsburgh (July 18-20) :

日程の都合上、手術の見学はできませんでしたが、スポーツ医学に特化した外来およびリハビリの総合施設である Freddie Fu Sports Complex (図1) と大学の研究施設を見学させて頂きました。Freddie Fu Sports Complex はNFLのピッツバーグスティーラーズの練習施設に併設されており、Freddie Fu 先生をはじめとするスポーツ分野のスペシャリストの先生方が外来を行っているのと同時に充実したリハビリ器具が揃っている施設でした(図1)。さらに大学に所属する研究施設のうち、生体の関節を中心とする動作解析を行う Biodynamic Laboratory、私自身が留学時代に所属していたロボットを用いた関節のバイオメカニクス研究を行う Orthopaedic Robotic laboratory を見学させて頂きました。週末には日本から留学しているフェローの先生方とともにリバーラフティングをさせて頂き、充実した時間を過ごすことができました。



図1 Freddie Fu 先生と

American Sports Medicine Institute (ASMI) (July 21-24) :

移動を除く2日間のうち、初日は外来とリハビリを2日目は手術をそれぞれ見学させて頂きました。山本先生と田代先生はLyle Cane 先生の外来を私はJeffrey Dugas 先生(図2)の外来を中心に見学させて頂きました。それぞれの先生に、4もしくは5人のフェローがついて指導を受けており、どちらの先生の外来にも野球選手を中心に肩、肘を中心とした上肢の障害に加えて地域の患者様も来院されていました。リハビリ施設ではGlen Fleisig 先生による実際の投球動作をモーションキャプチャーシステムを用いて解析を行い、そのデータもとに投球の指導を行っていました。2日目の手術ではJeffrey Dugas 先生とLyle Cane 先生の肩、肘の手術を中心に見学させて頂きました。とくに興味深かったのは肘内側側副靭帯の靭帯再建術とInternal brace を用いた肘内側側副靭帯修復術でした。さらに外来、リハビリ、手術の施設以外にもバイオメカニクス研究を行える実験施設も併設されていることやフロリダにあるDr Andrews Institute とのwebカンファレンスを行っており、フェローの教育にも非常に力を入れていました。

最後にこのような貴重な機会を与えてくださり、サポートして下さいました JOSSM の理事、国際委員の先生方、学会事務局の方々に心より感謝いたします。



図2 Jeffrey Dugas 先生と

2019年度 JOSSM-USA Traveling Fellowship 報告

弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座 山本 祐司

通常 traveling Fellowship の応募資格は 45 歳以下ですが、JOSSM-USA Traveling Fellowship は「50 歳以下」ということで、今回応募させていただきました。AOSSM に参加後、4 カ所の施設を訪問しましたが、最後の訪問先である HSS について報告させていただきます。

Hospital for Special Surgery in NY, (July 25-27)

HSS では残念ながらホストとなる先生が家族の問題で急遽不在となり当初の手術見学や外来見学ができなくなりました。当日直接交渉で、田代先生と私は Anil S. Ranawat 先生 (図 1) や Scott A. Rodeo 先生 (図 2) の膝の手術見学をしてきました。ACL 再建のほか、内側半月板後根修復、ロボット支援 UKA、大腿骨遠位骨切り術 (開大部に同種骨 + 骨髄濃縮液移植) など見学させていただきました。吉田先生は単独で肩の手術をやっている先生を探して熱心に勉強されていました。HSS では上の先生が手術の最初から入って自分の fellow に対して教育的に指導しているのが印象的でした。また、最終日には HSS

がサポートしている MLB ニューヨーク・メッツの試合観戦に連れて行っていただきました (図 3)。

HSS 以外では、15 年ぶりに留学していたピッツバーグを訪問し、MSRC の秘書さんとも偶然会うことができいい思い出となりました。最後にこのような貴重な機会を与えてくださいました JOSSM の理事、国際委員の先生方、学会事務局に深謝いたします。



図 2 Scott A. Rodeo 先生



図 1 Anil S. Ranawat 先生



図 3 シティ・フィールドにて



2019 JOSSM-USA Traveling Fellowship (July 10-29)

DATE	STAY	INSTITUTION	Host
2019/7/10-7/13	Boston, MA	AOSSM Annual Meeting 2019 Evening Reception at AOSSM (UPMC) , Evening of Camaraderie (ASMI)	
2019/7/14-7/17	Sacramento, CA	Operating room to observe two cases w/Dr. Kreulen. Cadaver lab at Sequoia surgical with teaching for foot and ankle experience. UC Davis Medical Center /Surgery Center to observe	Dr. Eric Giza
2019/7/18-7/20	Pittsburgh, PA	University of Pittsburgh Medical Center (UPMC)	Dr. Freddie Fu
2019/7/21-7/23	Birmingham, AL	Andrews Sports Medicine & Orthopaedic Center Visit to St. Vincent's Hospital	Dr. Jeffrey Dugas
2019/7/24-7/29	New York, NY	Hospital for Special Surgery (HSS) Observe the operation or the clinic of Dr. Altchek Watch a baseball game of NY Mets w/Mr. Beamer Carr	Dr. Josua Dines

■ GOTS-JOSSM-KOSSM Traveling Fellow 報告記

奈良県立医科大学整形外科 小川 宗宏

はじめに

このたび 2019 年度 GOTS/JOSSM/KOSSM traveling fellow として選出して頂き、5 月 31 日～6 月 29 日までの 1 か月間、ドイツ、スイス、オーストリアの 3 か国、12 都市を訪問研修させていただきましたので報告させていただきます。メンバーや行程は三重大学の西村明展先生が報告されますので、割愛させていただきます。

GOTS traveling fellow の歴史

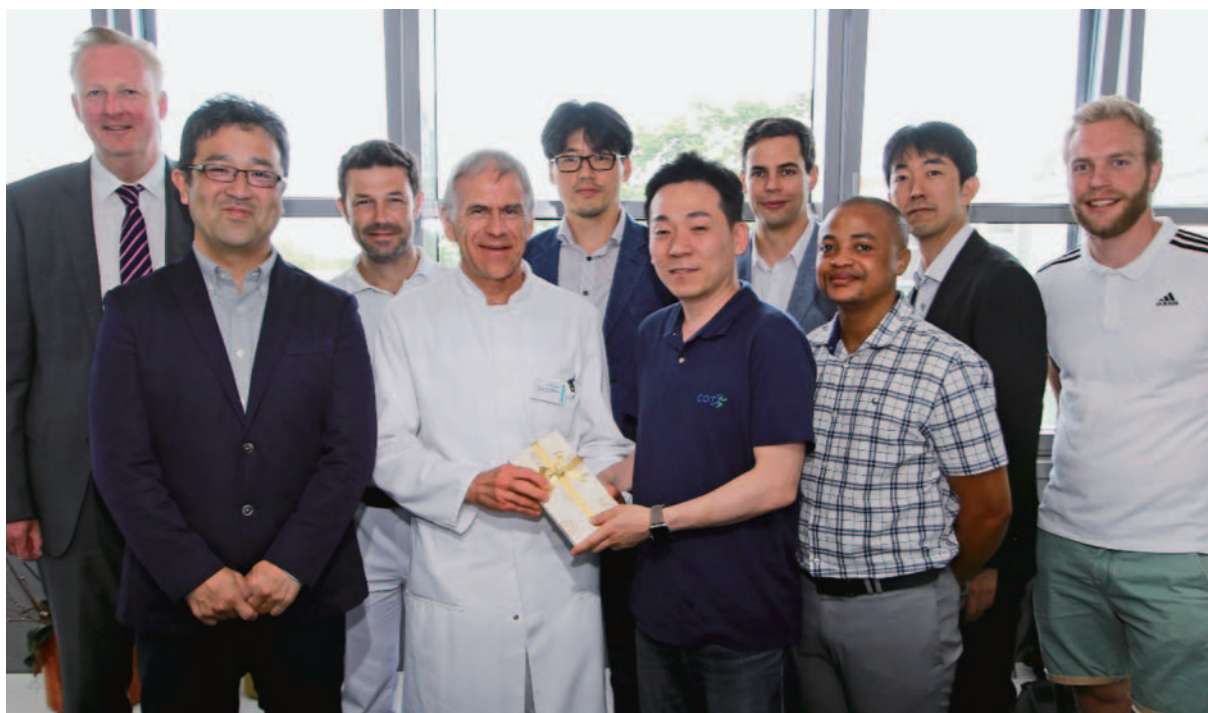
GOTS とは Gesellschaft für Orthopädische-Traumatologische Sportmedizin の略で、1986 年に設立されたドイツ語圏内のスポーツ医学会です。JOSSM/KOSSM との交換訪問制度は 1991 年にアジアから 4 名のフェローがヨーロッパを訪問して以来、1 年おきにお互いの fellow を交換しています。奈良医大でも GOTS Traveling fellow を毎回うけいれており、毎回刺激を受け、かねてより小生も参加したいと希望していたので、この度実現して、これまで奈良に訪問した沢山の GOTS traveling fellow

に再会でき、交友を深めることができました。

旅の日常

4 週間の間に 3 カ国、12 都市の訪問ですので、1 都市を 3 日程度で施設を見学し、フリータイムは半日 2 回のみとハードスケジュールでした。半日のフリータイムは洗濯をゆっくりする貴重な時間でした。1 日の基本スケジュールは朝 7 時前後にホテルを出発し、朝のカンファレンスに出席してプレゼンテーション、施設見学、手術見学、市内見学などでした。そしてそのまま dinner に突入し、夜 10 時過ぎにホテルに戻るとい生活でした。帰ってから洗濯をして、部屋干しをしてから翌日のスケジュールやプレゼンを確認して寝るとい日々でした。

ACL の再再建症例の脛骨の後傾を矯正する骨切り術などの未経験の手術を含めた手術見学、Olympic training center と大学との共同サポート体制の見学、キャダバーでの手術トレーニングや関節鏡のトレーニングマシンを用いた研修医のトレーニング教育システム、Mercedes Cup の医療サポートの



地元の新聞に GOTS traveling fellow が訪問したことが紹介されました。

実際、Host の先生が保有するボートでの Wannsee 湖周遊、最前列でのプロ選手のテニス観戦、Mozart Orchester 鑑賞、金メダリストと一緒に食事など、4 週間、毎日盛りだくさんのスケジュールであり、Host の先生の温かなご支援のもと、医療面のみならずヨーロッパの食事や文化をたくさん経験でき、とても有意義な経験をさせていただきました。

最後に

一緒に寝食をともにした三重大大学の西村明展先生、韓国の先生や南アフリカの先生との交流は人生の財産になりました。最後となりましたが奈良県立

医科大学整形外科の田中康仁教授、三重大大学整形外科の須藤啓広教授、フェローシップの機会を与えていただいた日本整形外科スポーツ医学会前理事長の松本秀男先生、国際委員会担当理事の黒田良祐教授、委員長の菅谷啓之先生、事務局の斎藤しおり様はじめ関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

GOTS/JOSSM/KOSSM traveling fellow は人生の機転にもなるような素晴らしい経験のできる traveling fellow であり、この経験を今後の研究、臨床ならびにスポーツ医学の発展に寄与できるように精進したいと思います。



GOTS Congress (Salzburg) で松本秀男理事長とともに



GOTS traveling fellow で奈良を訪問した fellow との再会

■ GOTS-JOSSM-KOSSM Traveling Fellow 報告記

三重大学医学部スポーツ整形外科 西村 明展

【はじめに】

日本整形外科学会スポーツ医学会から GOTS-JOSSM-KOSSM Traveling Fellowship に選出され、2019 年 5 月 31 日から 6 月 29 日までドイツ、スイス、オーストリアの有名施設を訪れる大変貴重な体験をさせて頂く機会を得ましたので、ご報告申し上げます。本 traveling fellow では日本より 2 名（私、三重大学西村と奈良県立医科大学より小川宗宏先生）に加え、韓国より 2 名（Chungnam national univerisity より Dr. Yong Bum Joo, Chosum Univerisity より Dr. Jo Suenghwan）の 4 名が参加しました。さらに、前半のドイツの 2 週間の間には、南アフリカ整形外科学会とドイツ整形外科学会のトラベリングフェローで南アフリカから 2 名（Inkoshi Alvert Luthuli Central Hospital より Dr. Phakamani G Mthethwa, Groote Schuur Hospital より Dr. Matthew Workman）が参加しました。3 か国の整形外科医が参加し、ヨーロッパ 3 か国を回る非常に world wide なトラベリングフェローでした。GOTS とはヨーロッパのドイツ語圏のスポーツ整形外科学会になります。我々の旅程では最初にドイツ 2 週間、その後にスイス 1 週間、オーストリア 1 週間で、最後のオーストリアの際にザルツブルクで GOTS の学会がありましたので、こちらの学会に出席し、発表して終了となりました。

【訪問都市（訪問期間）・施設】

Frankfurt (5/31-6/2) Linder Hotel & Sports Academy
 Wurzburg (6/1) (Sightseeing)
 Osnabrück (6/2-4) Klinikum Osnabrück
 Rostock (6/4-6) Universitätsmedizin Rostock
 Berlin (6/6-10) Martin-Luther-Hospital
 Heidelberg (6/10-13) Universitätsklinikum Heidelberg, ATOS Klinik Heidelberg
 Stuttgart (6/13-15) Sports Clinic Stuttgart
 Lucerne (6/15-16) (Sightseeing)
 Basel (6/16-20) University Hospital of Basel, Rennbahnklinik Basel, Swiss Ortho Center Basel
 Geneva (6/20-22) University Hospital of Geneva

Vienna (6/22-26) Medical University of Vienna
 Krems (6/26) University Hospital Krems, Danube University

Saltburg (6/26-29) Annual GOTS congress
 以上、4 週間で 3 か国 14 都市、14 施設になります。

【手術】

本トラベリングフェローでは米国などと違い、手洗いをして間近で手術を見学することができ、これは GOTS traveling fellow の大きな魅力かと思えます。手術の手技的にはさほど、大きな違いはないように感じました。しかしながら、その周りの環境は大きく異なり、日本に比べ（特に我々が所属している大学病院に比べ？）、systematic に動いており、外科医が手術室で過ごす無駄な時間が少なく、麻酔科医、看護師、レジデントやフェローが見事に外科医をフォローしていました。我々も、ただこれをうらやましいと思うだけでなく、そのような環境づくりをしなければならないと強く感じました。インプラントや術式は、日本と少し流行が異なることもありました。最も数多く見学をさせていただいた前十字靭帯再建術では、大腿四頭筋腱を用いる施設が、ハムストリングや骨付き膝蓋腱を用いる施設より多かったのが印象的でした。インプラントも日本では使用できないような人工関節や固定材料などがありました。印象的な手術術式としてはスポーツ領域ではありませんが、外反母趾の経皮手術で、近年、ヨーロッパを中心にその頻度が増えてきているということでした。矯正と初期固定をうまくできれば、美容面、組織治癒の面でも優れた術式であると感じました。

【研究】

臨床面だけでなく、研究施設なども多く見学させていただきました。Basel の Rennbahnklinik はプライベートクリニックでありながら、バイオメカの施設と器材が充実しており、さらに専門のバイオメカのテクニシャンがいるという、非常にうらやましい環境の施設でした。術後の患者さんにも動作解析をして、すぐにその結果を医師・リハビリスタッフ・患者さんにフィードバックしており、研究と臨床が

直結したすばらしいシステムであると感じました。

【観光・スポーツプログラム】

ヨーロッパの歴史ある各国の名所を見学させていただきました。ドイツでは歴史あるハイデルベルグ城に行ったり、Mercedes benz 博物館でその歴史を勉強したり、ベルリンではドイツ分断・合併の歴史を学ぶとともに、ベルリンの壁の前では色々と考えさせられました。自然も豊かな国々ですので、スイ

スの Lucerne では登山をさせていただいてアルプスの素晴らしい景色を堪能しました。スポーツプログラムで最も印象的だったのが Vienna で全員初めてのウェイクボードをしたことでした。いずれも普通に生活していたら経験できない特別な経験でした。

【食事】

ほぼ毎日、夕食は食事に連れて行っていただきました。どこの食事もおいしく、毎日のように異なる



写真 1 ベルリンの壁の前にて

左から Dr. Jo Suenghwan、Dr. Yong Bum Joo、小川宗宏、西村明展、Dr. Phakamani G Mthethwa、Dr. Matthew Workman



写真 2 University Hospital of Basel の手術室にて

左より西村明展、小川宗宏、Dr. Jo Suenghwan、Dr. Christian Egloff、Dr. Yong Bum Joo

現地のビールをいただきました。数少ないフリーの夕食ではみんなで日本風居酒屋にいて交流を深めたのも良い思い出です。

【最後に】

始まる前には4週間は長い期間であると考えていましたが、終わってみるとあっという間の4週間でした。しかしながら、内容はとても濃密で、整形外科医としての臨床面のみならず、各国の先生の生き方をみることで一人の人間としても色々と考えさせられる traveling fellow でした。どこの都市・施設にいても今までに経験をしたことのない歓待を受けることができ、これも日本整形外科学会スポーツ医学会の先生方が長年かけて築き上げて下さった GOTS の先生方との絆のおかげであると感謝して

おります。

最後に、traveling fellowship をともに過ごした奈良医大の小川宗宏先生、韓国と南アフリカの先生に感謝するとともに、各訪問先でお世話になりました先生・スタッフの皆様、フェローシップへの応募・参加を快諾頂きました三重大学整形外科の須藤啓広教授、奈良県立医科大学整形外科の田中康仁教授、フェローシップの機会を与えていただいた日本整形外科学会スポーツ医学会前理事長の松本秀男先生、国際委員会担当理事の黒田良祐教授、委員長の菅谷啓之先生、事務手続きでお世話になりました事務局の斎藤しおり様はじめ関係の皆様がこの場をお借りして深く御礼申し上げます。



写真3 GOTS Congress (Salzburg) の dinner にて
左より小川宗宏、Dr. Jo Suenghwan、松本秀男理事長、Dr. Yong Bum Joo、西村明展



GOTS-KOSSM-JOSSM-Fellowship by Arthrex 2019

31. May. 2019-29. June. 2019

DATE	COUNTRY	CITY	INSTITUTION	Host
2019/5/31-6/4	Germany	Frankfurt Würzburg Osnabrück	Klinikum Osnabrück, Department for Orthopedic surgery and Traumatology	Prof. Dr. Martin Engelhardt Dr. Casper Grim Dr. Paul Brinkmeier
2019/6/4-6/6		Rostock	Orthopädische Klinik und Poliklinik Universitätsmedizin Rostock	Prof. Dr. Thomas Tischer Prof. Dr. Wolfram Mittelmeier
2019/6/4-6/10		Berlin	Martin Luther Hospital, Department of Trauma and Orthopaedic Surgery	Prof. Wolf Petersen
2019/6/10-6/13		Heidelberg	University Heidelberg ATOS Clinic Heidelberg	Prof. Dr. Holger Schmitt Dr. Gregor Berrsché
2019/6/13-6/15		Stuttgart	Sports Clinic Stuttgart	Dr. med. Frieder Mauch Dr. Chris Weller
2019/6/15-6/16	Switzerland	Luzern	*Sight Seeing Lucerne	Dr. Sebastian Thormann
2019/6/16-6/20		Basel	University Hospital of Basel Rennbahnklinik Swiss Ortho Center	Dr. Christian Egloff PD Dr. Jochen Paul Prof. Victor Valderrabano
2019/6/20-6/22		Geneva	University Hospital of Geneva	Dr. Philippe Tscholl
2019/6/22-6/26	Austria	Vienna	Medical University of Vienna, Vienna General Hospital, Department of Orthopedics and Trauma Surgery	Dr. Madeleine Willegger Prof. Catharina Chiari
2019/6/26		Krems	Center for Regenerative Medicine Danube University Krems Orthopedic Department University Hospital Krems	Prof. Stefan Nehrer Dr. Markus Neubauer
2019/6/26-6/29		Salzburg	*Annual GOTS Congress	Dr. Philipp Schultes Dr. Bernd Hiller

■ 第19回 市民・学生のためのスポーツ医学セミナー開催報告

東京慈恵会医科大学スポーツ・ウェルネスクリニック 舟崎 裕記

2019年8月17日、日本整形外科学会スポーツ医学会主催のもと「第19回市民・学生のためのスポーツ医学セミナー」を東京慈恵会医科大学講堂にて開催いたしました。このセミナーは、大学生・高校生を対象にスポーツ医学に関する正しい知識と技術をわかりやすく学んでもらうための機会を提供することを目的に、毎年、夏に開催されておりますが、今回から市民・学生と名称を変更し、スポーツに勤しむ青少年や将来、トレーナーやスポーツドクターを目指す学生に加え、その父兄や指導者などにも対象を広げました。当日は晴天に恵まれ、参加数は台風の影響で申し込み数より少なくなりましたが、約180人となり、内訳は学生が約1/3、医療関係者と一般がそれぞれ約1/5でありました。

日本整形外科学会スポーツ医学会理事長の松本秀男先生による開会の挨拶後、セミナーを3部構成で行いました。別にプログラムも掲載しますが、第1部では、当科スタッフにより、コンディショニングやアスレティックリハビリテーションの実際、代表的なスポーツ傷害などの基礎知識に関する講義を行いました。続いて、第2部では、「スポーツドクター、トレーナーになるために」と題し、現サッカー日本

代表ドクター、ならびに元Jリーグプロサッカーチームの理学療法士に講演を行っていただきました。苦労話しや嬉しかったことなども交え、それぞれの体験をもとに日頃行っている業務などを中心にお話しいただきました。さらに、第3部では、元プロ野球選手の和田一浩氏、元プロテニス選手の沢松奈生子氏に登壇いただき、著者も含め、「子供達を怪我から守り、そして育てる」と題した座談会形式のシンポジウムを行いました。近年では、子供を取り巻く環境によって、同一スポーツ競技への開始が低年齢化している傾向がありますが、一方では、それに伴うスポーツ傷害も増加しています。それぞれの演者ともご自身のお子さんに対していかに接してこられたかの体験をもとに、今後、指導者に望むことや傷害に対する向き合い方などについて、我々、スポーツドクターとともに議論し、また、聴衆からも多くの質問、意見もいただきました。

参加者に対するアンケートでは、それぞれの部とも大変勉強になったとの感想を多くいただき、こうした一般向けのスポーツセミナー啓蒙の重要性を改めて実感し、今後も永く継続されることを願っております。

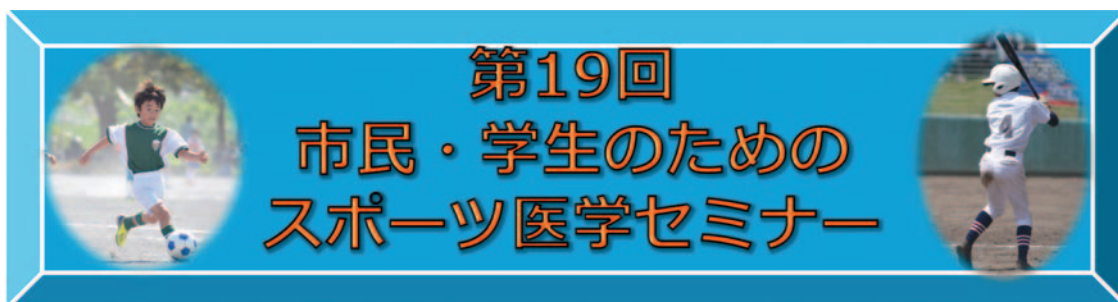


第1部セミナー光景



第3部 シンポジスト

左から 沢松奈生子氏、著者、司会の岩間 徹先生、和田一浩氏



総合司会

東京慈恵会医科大学整形外科教授 舟崎裕記

開会 (13:00)

開会の辞 日本整形外科スポーツ医学会 理事長/公益財団法人 日本スポーツ医学財団 理事長 松本秀男

第1部 (13:00~14:30)

「スポーツ医学の基本知識」

座長：村山雄輔 (東京慈恵会医科大学スポーツ・ウェルネスクリニック)

1. コンディショニング 東京慈恵会医科大学スポーツ・ウェルネスクリニック 敦賀 礼
2. 成長期のスポーツ傷害とその対策 同上 窪田大輔
3. スポーツに伴う膝傷害 同上 林 大輝
4. 傷害からの復帰リハビリテーション 同上 理学療法士 川井謙太郎

<休憩 10分>

第2部 (14:40~15:50)

「スポーツドクター、スポーツトレーナーになるために」

座長：舟崎裕記 (東京慈恵会医科大学スポーツ・ウェルネスクリニック教授)

1. プロサッカーチームのトレーナーの役割 元湘南ベルマーレ理学療法士 小川岳史
2. サッカー日本代表チームドクターの役割 立教大学スポーツウェルネス学科教授 加藤晴康

<休憩 10分>

第3部 (16:00~17:30)

座談会「子供達を怪我から守り、そして育てる」

司会：岩間 徹 (潤生会岩間整形外科理事長)

- | | | |
|----------|-------|-----------------|
| 元プロ野球選手 | 和田一浩 | <野球の立場から> |
| 元プロテニス選手 | 沢松奈生子 | <テニスの立場から> |
| | 舟崎裕記 | <スポーツドクターの立場から> |

閉会 (17:30~17:40)

閉会の辞/セミナー修了証の授与

東京慈恵会医科大学整形外科教授 舟崎裕記



プログラム (ポスターより)

■ お知らせ

1. 第20回市民・学生のためのスポーツ医学セミナー 開催延期のお知らせ

2020年5月31日に予定していた第20回市民・学生のためのスポーツ医学セミナーは、新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大の影響を考慮し、開催を延期することとなりました。開催日が決定次第、本ホームページにてご案内いたします。

2. スポーツ損傷シリーズ

スポーツ損傷シリーズは、本学会監修の患者・関係者説明用パンフレットとして、現在、No. 32まで制作しています。学会ホームページにてPDFファイルの保存および印刷が可能ですので、是非、ご活用ください。

なお、本シリーズ掲載の記事・写真・イラスト等を使用する場合は、必ず学会事務局に申請してください。

◆『スポーツ損傷シリーズ』URL ⇒ <http://www.jossm.or.jp/series/index.html>

3. American Journal of Sports Medicine (AJSM) の購読について

本学会の会員は、American Journal of Sports Medicine (AJSM：年12冊発行)を特別優待価格で購読することができます。

	一般価格	特別優待価格
AJSM 購読	\$ 250.-	\$ 136.-
オンライン購読	一般向けサービスなし	\$ 40.-

※2020年1月契約分より価格改定

AJSM購読、オンライン購読のどちらにお申し込みいただいても、1972年の創刊号以降の全刊行物にアクセスが可能です。特別優待価格での購読を希望される会員の方は、事務局あてにメールにて購読希望である旨をご連絡ください。(info@jossm.or.jp) 追ってお申し込みについてのご案内をお送りしますので、各自で購入手続を進めてください。

4. 会員登録情報の変更、メールアドレスの登録について

勤務先、自宅、メールアドレスに変更がありましたら、お早めに事務局あてメールにてご連絡ください。(info@jossm.or.jp) ご連絡がない場合、学会雑誌をはじめ事務局からのご案内がお手元に届かないことがありますのでご了承ください。また、日々のご連絡の他、学会情報や演題登録のご案内など、今後は一斉メールを活用して事務局からご案内をお送りいたしますので、メールアドレスをご登録いただいていない方は、事務局あてご連絡ください。

編集後記

まさかの新型コロナウイルスのパンデミックにより、グローバル化した現代社会で初めての地球規模での大惨事が起きました。本来であれば希望に満ちた記念すべき2020年になるはずが…。全く先の見えない長期戦の覚悟をせねばならない現状で、医療崩壊の危機に直面し、私たちスポーツ整形外科医は何ができるのか、自問自答せずにはいられません。トリアージの観点から、整形外科、特にスポーツ関係の手術は、待機せざるを得ない状況の医療機関も多々あると思います。緊急事態宣言が全国に発令され、スポーツ活動も制限され、プロスポーツ界も開催すら不透明な状況に陥っています(無観客試合など想像もできません)。思わず俯いてため息をつきたくもなりますが、こんな時こそ一年前のラグビーW杯を思い出し、ONE TEAMの旗の元に上を向き前に進まねばなりません。この未曾有の一大事に、スポーツを支える立場の我々ができることは何か。今こそスポーツの世界で培った栄養学や心理学、トレーニング理論の重要性を再認識し、知識をアップデートすべきベストな機会だと思います。パンデミックの第一線での活躍はできずとも、スポーツ界のあらゆるネットワークを駆使して、栄養、メンタル、フィジカルサポートでウイルスに対する免疫力を最大限に高められる様、上を向いて情報発信をして行きましょう。(藤井康成)

日本整形外科スポーツ医学会 ニュースレター No. 19 2020年4月30日発行

編集：日本整形外科スポーツ医学会広報委員会

中川 泰彰(担当理事)、高橋 敏明(委員長)、酒井 宏哉(アドバイザー)

新井 祐志、田崎 篤、辰村 正紀、藤井 康成、安田 稔人

発行：一般社団法人日本整形外科スポーツ医学会

〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5

オンワードパークビルディング 株式会社コングレ内

TEL 03-3510-3744 / FAX 03-3510-3748

E-mail info@jossm.or.jp URL <http://jossm.or.jp>